



シノドス事務局

# 「あなたの天幕に場所を広く取りなさい」 (イザヤ 54・2)

大陸ステージのための作業文書 [暫定第2版]



バチカン市、2022年10月24日

## はじめに

### 1. シノドスの旅の経験

1. 1. 「シノダリティの果実、種、毒麦」
1. 2. わたしたち共通の洗礼による尊厳

### 2. 聖書に耳を傾ける

### 3. 宣教するシノド斯的教会を目指して

3. 1. 耳を傾けることが歓迎することになる
3. 2. 宣教のための姉妹と兄弟
3. 3. 交わり、参加、そして共同責任
3. 4. シノダリティが形になる
3. 5. シノドス的生活と典礼

### 4. 次のステップ

4. 1. 回心と改革の旅
4. 2. 大陸ステージの方法論

## はじめに

1. シノドスは継続中です。シノドスの旅が始まって1年、わたしたちはこのことを熱狂的に確認することができます。この意見聴取ステージの最初の部分で、世界中の何百万人もの人々がシノドスの活動に参加しました。ある人は地方レベルの集いに参加し、ある人はさまざまなレベルの活動の活性化と調整に協力し、ある人は祈りの支えを提供しました。「わたしたちはまた、シノダリティの実りのために祈りに同伴し、祈り続けている観想的な修道女たちに感謝の意を表します」(ペルー司教協議会)。関わったこれらすべての人々が、シノドスの真の主人公です。
2. 彼らは、この歩み全体を導く基本的な問いに応えようとする願望に促されて動き出しました。「今日、さまざまなレベル（地方レベルから全世界レベルまで）で行われているこの『ともに旅をする』ことは、教会がゆだねられた使命に従って福音をのべ伝えることを可能にするでしょうか。また、シノドス的な教会として成長するために、聖霊はどのような段階を踏むようにわたしたちを招いているでしょうか」（「準備文書」2）。
3. その過程で、キリストにある兄弟姉妹として出会い、みことばに耳を傾けて心に響いたことを分かち合い、「準備文書」の推進力に基づいて教会の未来についてともに考える喜びを味わいました。このことは、ますますシノドス的な教会への願いをはぐくみました。シノダリティは彼らにとって抽象的な概念ではなく、具体的な経験となり、その味を知り、それを続けたいと思うようになったのです。「このプロセスを通して、わたしたちは、シノダリティが教会であるための方法であること——実際、教会であるための方法である——を発見しました。聖霊はわたしたちにもっとシノドス的であるよう求めておられるのです」(イングランド・ウェールズ司教協議会)。
4. 彼らの経験は、さまざまな共同体やグループが教区に送った提出文書の中で翻訳された。これらの提出文書は統合され、司教協議会に伝えられ、司教協議会は「準備文書」に含まれるアウトラインから、報告書を作成し、シノドス事務局に送られた。
5. 世界的に見ても、参加者は予想を上回るものでした。シノドス事務局は、114の司教協議会のうち112と15の東方典礼カトリック教会すべてから、また、男女修道会連盟、奉献生活の会、使徒職団体、信徒団体、信徒運動体から、23の教区のうち17の教区からの意見も寄せられました。さらに、「デジタル・シノドス」のイニシアチブにより、個人やグループから1000を超える提出文書と、ソーシャル・メディアを通じて集められた洞察が寄せられました。これらの資料は、司教、司祭、奉献生活者、信徒、信徒女性など、あらゆる大陸から集まった、非常に多様な専門分野を持つ専門家のグループに配布されました。報告書を読んだ後、これらの専門家は、総代理、シノドス事務局長、次官、シノドス事務局のさまざまな職員、さらに調整委員会のメンバーからなる執筆グループとともに、ほぼ2週間にわたって会合を持ちました。このグループには、最終的に総評議会のメンバーも加わりました。彼らはともに祈りと識別の雰囲気の中で、この「大陸ステージ文書」の起草の準備のために、読書の成果を分かち合うために働きました。

6. 「大陸ステージ文書」を飾る引用文は、世界各地の神の民の声をできるだけ自分たちのことばで語らせ、共鳴を見出すことで、受け取った資料の豊かさについての考えを与えようとするものである。また、出典のバランスには留意していますが、特定の地域の立場を支持したり、単に地理的な多様性を表現していると解釈されるものではありません。むしろ、これらの引用文は、多くの報告書で一般的に表現されている感情を、とくに力強く、美しく、的確に表現しているという理由で選ばれたものである。しかし、寄せられた提出文書から溢れ出る信仰の深さ、希望の活力、慈愛のエネルギーを一つの文書に凝縮することができないことは明らかです。その背後には、さまざまな教会から寄せられた多様な声に耳を傾け、自らを開放することによって得られた経験の力と豊かさを垣間見ることができるのです。この出会いと対話を可能にすることが、シノドスの旅の意義であり、その究極の目的は、文書を作成することではなく、教会の宣教の実現に向けて希望の地平を開くことにあるのです。

7. この「大陸ステージ文書」が位置づけられ、その意味を見出すことができるのは、結論まではまだかなり遠いところにいる、この旅の中なのです。シノドスの旅が大陸ステージにあるという観点から、この文書は、全世界の神の民の希望と懸念を、少数の核を中心に置いて構成しています。このように、本文書は、2023年の大陸ごとの総会に向けて、各地方教会に、互いの声に耳を傾ける機会を提供するものです。その任務は、2023年10月4日から29日まで開催されるシノドス第16回通常総会で、優先事項のリストを作成し、それに基づいて、識別を行うことです。

8. 「大陸ステージ文書」の機能を明確にすることはまた、それが何でないかに焦点を当てることを可能にします。つまりそれは、歩みがまだ終わっていないため、決定的な文書ではなく、教会の司教の文書でも、社会学的調査の報告書でもなく、運営上の指示、目標、目的の定式化を提供するものではなく、神学的ビジョンの完成された労作でもありません。しかし、この文書は、神の民によって実現された聖霊の声に耳を傾け、その「信仰の感覚」の現れを可能にした経験に含まれる、絶妙な神学的な宝を含んでいるという意味で、神学的文書です。しかしそれはまた、世の救いのために死んで復活されたキリストをのべ伝えるという教会の使命のために方向づけられたという意味で、神学的文書です。

9. この文書の読解において誤解を避けるためには、その構成と同様に、「大陸ステージ文書」の特殊な性質を心に留めておくことが不可欠です。この文書は、「何が起こったか」という単純な説明以上のものを提供する章から始まり、地方教会における神の民からの意見聴取と、司教協議会における司教たちの識別とともに、これまでに経験したシノダリティの物語を提示します。シノドスの経験の概略を描き、遭遇した困難と集められたもっとも重要な成果を示し、キリスト教信仰の本物の集合的な経験を構成するものの基礎を特定します。このように、本文書は厳密な意味でのシノダリティの定義——このためには「準備文書」やシノドスのウェブサイト ([www.synod.va](http://www.synod.va)) に掲載されている資料を参照することができる——を提供するものではなく、参加した人々が生きたシノダリティ経験の共有された感覚を表現しています。そこに現れるのは、洗礼を受けたすべての人々の共通の尊厳の深い再認識です。これこそ、シノドス的教会の真の柱であり、均質化への押しつけに抵抗することのできる一致の神学的基礎なのです。これによって、わたしたちは、聖霊が予測で

きないほどの豊かさで信徒に注ぐ多様なカリスマを引き続き促進し、有効に活用することができるのです。

10. 第2章は、イザヤ書第54章の冒頭に出てくる天幕のイメージという聖書のしるしを提示します。このイメージと物語は、「大陸ステージ文書」の内容を神の民と教会の召命となる神の約束のアークの中に置きながら、みことばの光の中でその内容を解釈するための鍵を示しています。「天幕を広く取りなさい」。

11. この天幕は、交わりの空間であり、参加の場であり、宣教のための基盤です。第3章は、シノドスの旅のキーワードを、神の民に耳を傾ける実りと結びつけて、明確にしています。それは、互いに絡み合う、何かを生み出す五つの緊張の周りにそれらを集めることによって行われます。

- 1) 歓迎の開放性としての耳を傾けること。これは、姉妹や兄弟、そしてわたしたちの共通の父との交わりという観点から理解されるように、誰も排除されないという根源的な包摂への願いから始まります。耳を傾けることは、ここでは道具的行為としてではなく、その民に耳を傾ける神の基本姿勢を前提として、福音書が絶えず聖なる地の道で彼のもとにやって来る人々に耳を傾ける行為の中でわたしたちに示す主の後を追うものとして現れてきます。この意味で、耳を傾けることはすでに宣教であり告げ知らせなのです。
- 2) 宣教に向かうわたしたちの外への推進力。これは、カトリック信者が、他の宗派の兄弟姉妹とともに、また、他の宗教の信者との対話の中で遂行される必要があると認識している使命であり、人間のケアの行いを、わたしたちが豊かなのちを持てるようにと、自らのいのちをささげるまでにケアする神のみ顔をのべ伝える、真に霊的な体験に変えていくのです。
- 3) 宣教の遂行には、参加に基づくスタイルをとることが必要であり、これは、共通の洗礼の尊厳から生じる教会の唯一の使命に対して、洗礼を受けたすべての人が共同責任を完全に負うことに該当することがらです。
- 4) 生きた霊性によって適切に養成され、維持された人々が生きる組織と団体を通して、生きた交わり、参加、宣教のための具体的な可能性を構築すること。
- 5) 典礼、とくにキリスト教生活の源泉であり頂点であるミサは、共同体を一つにまとめ、交わりを具体化し、参加の実践を可能にし、みことばと秘跡によって宣教への勢いを涵養するものである。

12. 最後に、第4章は、この道を進むために不可欠な二つのレベル、すなわち、宣教的なシノドス的回心の地平に向かってわたしたちを方向づけようとする霊的レベルと、大陸ステージの次のステップをたどる方法論的レベルに訴えることによって、未来に向けた兆しを提供します。

13. 「大陸ステージ文書」は、それがシノドス的な教会への回心の道筋を示すあかしであると認識する弟子の目で読まれる場合に限り、理解でき、有用となります。つまり、教会は、時代のしるしに照らして、どのようにその福音宣教を刷新するか、また、すべての人が主人公として含まれていると感ずることができるような存在と生き方を人類に提供し続けるために、耳を傾けることから学びます。この道に沿って、わたしたちの歩みを照らす灯火は神のことばであり、それは、生きてきた経験を読み直し、解釈し、表現するための光

を提供するものです。

14. わたしたちはともに祈ります。

主よ、あなたはすべての民をシノドスに集められました。

わたしたちは、この喜びのためにあなたに感謝をささげます。

それは、この一年間、神と兄弟姉妹に耳を傾けるために

出向いていくことを決めた人々が経験した喜びでした。

それは、歓迎、謙遜、もてなし、兄弟愛という態度でなされました。

わたしたちが「聖なる地」にいるような気持ちで、

以下のページに進むことができるように助けてください。

聖霊、来てください。あなたがともにいる、旅の導き手でありますように。

## 1. シノドスの旅の経験

15. 世界中の教会から送られてくる報告書は、キリストの弟子たちの喜び、希望、苦しみ、傷を代弁しています。彼らのことばには、全人類の中心にあるものが共鳴しているのが聞こえます。彼らは、聖霊の導きのもとにキリストとともに歩み、福音化の使命を果たす教会への願いを表現しています。「わたしたちの現在の『シノドス』の経験は、教会の生活、今日の世界との関わり、そして地上での司牧活動に関わるという考えを信徒の中に呼び覚まし、またそうしたいという気持ちを起こさせました」（カナダ司教協議会）。

### 1. 1. 「シノダリティの果実、種、毒麦」

16. シノダリティの旅の最初の部分は、豊かな実りと、新たな成長を約束する新しい種、そして何よりも、困難な時代における喜びの経験を生み出しました。「シノダリティの果実、種、毒麦から生まれるものは、教会への大きな愛を持った声であり、信頼できるあかし人の教会、包摂的で開かれた、歓迎すべき神の家族である教会を夢見る声です」（ジンバブエ司教協議会）。ハイチは多くの人に代わって語っています。「誘拐や暴力の事件が続いているにもかかわらず、各教区からの報告書は、このシノドスの第一段階に積極的に参加することができた人々の喜びを表現しています」（ハイチ司教協議会）。この喜びは、多くの人々が他の人々にも広げ、分かち合うことを求めているものです。エビバイン教区（赤道ギニア）は次のように言っています。「このシノドスの経験は、多くの人々がキリスト教生活の中で経験することができたもっともやりがいのあるものの一つです。シノドスの働きが始まった最初の瞬間から、現在に至るまで、神の民の間には大きな熱意があります」。シノドス体験の果実の中で、いくつかのまとめは、教会への帰属意識が強まったことと、教会が司祭や司教だけではないことを実際的なレベルで実感したことを強調しています。「『今日、あなたの特定の教会では、このともに歩む旅はどのように起こっていますか』という基本的な問いを共有しながら、人々は教会の本質を理解することができ、その光の中で、自らの部分教会の状況を見ることができたことが指摘されています」（バングラデシュ司教協議会）。

17. 多くの人々が教会生活の現実を正直に見つめ、光と影を挙げることができるようになった霊的対話の方法は、広く評価されました。この率直な評価は、すぐに宣教の実を結びました。「神の民が強く動員され、ともに来る喜び、ともに歩む喜び、そしてともに歩み、自由に語り合う喜びがあります。傷ついたり感じ、教会から距離を置いていた信者たちが、この意見聴取の段階で戻ってきたのです」（中央アフリカ共和国司教協議会）。多くの人々が、教会が自分たちの意見を求めたのはこれが初めてであり、この旅を続けたいと願っていることを強調しました。「信徒や共同体のすべてのメンバーが率直かつ正直に意見を述べるのできるシノドス的方法の精神に基づく集いや、教会外のさまざまなグループとの集いは、今後も継続されるべきです。このような協力は教会文化の『慣習法』の一つとなり、教会の信者と社会のグループとの和解を促進し、より深い対話のための人々の心構えを作り出すべきです」（ラトビア司教協議会）と述べています。

18. しかし、報告書では隠されていない課題も少なくありません。あるものは、意見聴取の段階がパンデミックと重なったことに関連するものであり、他のものは、シノダリティとは何かを理解することの難しさ、資料の翻訳と文化浸透のためのさらなる努力の必要性、いくつかの地域の文脈でシノダリティのための集会

を組織することの失敗、基本提案への抵抗に由来するものでした。拒絶することの非常に明確な表現には事欠きません。「わたしはシノドスに不信感を抱いています。シノドスを信頼しません。シノドスはキリストの教えをさらに変え、キリストの教会をさらに傷つけるために招かれているのだと思います」(英国からの個人の提出文書)。シノドスを強調することが、教会を民主主義的な多数決原理を採用する方向に向かわせるのではないかという懸念が、頻繁に表明されています。困難の中には、シノドスの歩みの真の効果や意図に対する懐疑論が指摘されるべきです。「教会を、変化や近代化を望まない硬直した機関として認識しているため、あるいは、シノドスの結果はあらかじめ決まっていたのではないかという疑念のために、シノドスの歩みの結果について疑念を表明する人もいました」(カナダ司教協議会)。

19. 多くの報告書が、聖職者側の恐れや抵抗だけでなく、信徒の消極性、自由に自己表現することへの恐れ、そして、シノドスのダイナミズムの中で司祭や司教の役割を理解し明確に表現することへの苦悩に言及しています。「この歩みでは、抵抗、参加の欠如、参加しない共同体もありました。これは、多くの共同体がこのような教会の生き方に慣れていないため、この課題が斬新であったことが一因であったかもしれません。また、一部の指導者や司教が、彼らにふさわしい生き生きとした指導的な役割を果たせなかったことも原因でした。いくつかの教区の報告書は、司祭の関与の欠如や弱さを訴えています」(チリ司教協議会)。多くの場合、司祭とそれ以外の神の民の間に隔たりがあるという認識が広まっていることが、シノドスの歩みと資料から明らかになりました。「教区や国レベルでの意見聴取は、多くの場所で司祭と信徒の関係が困難であることを示しました。一方では、聖職者と信徒との間に距離があるとの批判があり、あるところでは、司祭が実りある共同体の妨げになっているとさえ言われています。同時に、司祭の課題も挙げられています。司祭の不足とボランティアの減少が疲労を招き、また、司祭はいつも話を聞いてもらっているとは思っておらず、中には自分の働きに疑問を感じている人もいます。よい司祭とはどのような人なのでしょう。どうすれば小教区の生活が関係者全員にとって豊かな経験となるのでしょうか。なぜ召命を感じる男性が少なくなっているのでしょうか。これらの疑問は議論される必要があります」(オーストリア司教協議会)。

20. とともに歩む道においてとくに関連性の高い障害は、聖職者や教会の役職者による虐待のスクandalです。何よりもまず、未成年者や弱者に対する虐待、そして他の種類の虐待(霊的、性的、経済的、権威、良心)です。これは、被害者とサバイバー、その家族、そして地域社会に苦痛を与え続ける、開いたままの傷なのです。「聖職者の性的虐待の危機と教会の対応の影響について継続的に言及されました。……多くの人々にとって、この事件の余波はいまだに強力な未解決の問題です。恐怖と被害を認め、弱者を保護し、教会の道徳的権威へのダメージを修復し、信頼を回復するための努力を強化することへの強い緊急性がありました。いくつかの教区では、参加者が過去の虐待を認め、償うことを公に望んでいると報告されました」(オーストラリア司教協議会)。虐待の遺物に対する慎重で痛ましい反省から、多くのシノドスグループは、より高い透明性、説明責任、共同責任を視野に入れて、教会の文化的変化を求めています。

21. さらに、あまりにも多くの国々で、シノドスの道は、わたしたちの世界を血で染める戦争と交差し、「あらゆる種類の狂信と迫害、さらには虐殺に自由裁量を与えてきました。宗派や民族の扇動が指摘され、それが武力紛争や政治紛争に発展し、しばしば流血の事態を招きました」(マロン典礼カトリック教会)。とくに



痛ましいのは、カトリックを含むキリスト教徒が、互いに戦争状態にある国に住んでいるという状況です。十字架と復活の体験を何度も重ねるようなこうした危機的状況においても、キリスト教共同体は、共同体の経験を積み、ともに歩むことの意味を考え、それを継続する希望を表明するために、彼らに向けられた招きを受け入れることができたのです。「ルワンダの人々を分断したツチ族に対する大虐殺の悲劇について、集団の記憶の真のいやしのために、交わりのテーマをより深めるべきです。今回のシノドスは、一致と和解の司牧が引き続き優先されなければならないことを、わたしたちによく理解させてくれました」(ルワンダ司教協議会)。

## 1. 2. わたしたち共通の洗礼による尊厳

22. 生きたシノダリティの実践は、「わたしたち全員が洗礼を通して共通の尊厳と召命を共有し、教会生活の参加者となっていることを認識する極めて重要で貴重な瞬間」(エチオピア司教協議会)を構成しています。洗礼を抽象的な概念としてではなく、実感できるアイデンティティとしてとらえるこの根本的な言及は、シノドス的な教会形態とその使命を果たす可能性との関連性に直ちに焦点を当てます。「洗礼の恵みを受けたすべての人が、自らに呼びかける聖霊の導きを分かち合い、識別しながら、ともに歩いていくことが重要であるという理解も深まり、『シノドスの教会』においては『ともに歩む』ことが宣教する教会となる道であるという有意義な気づきがあった」(日本司教協議会)。多くのキリスト教諸派が存在する状況下で、多くの地方教会は、すべてのキリスト教の姉妹・兄弟の洗礼による尊厳と、福音への奉仕という共通の使命をとくに強調しています。シノドスの歩みは、他の宗派の兄弟姉妹と出会い、彼らと分かち合い、対話し、共通の行動に携わることなしには不完全なものです。報告書は、より深いエキュメニカルな出会いへの願望と、この仕事を支えるための養成の必要性を表明しています。

23. 報告書では、シノドスのプロセスが斬新で新鮮な経験であったことが述べられています。「神の民は、自由に話し、聖霊の導きによる開放的で注意深い組織的な会話の中で聞かれることのユニークさについて発言しました。彼らは、何十年も教会に通っていたのに、初めて話すように言われたと述べています」(パキスタン司教協議会)。もう一つのイメージは、解放と新しいいのちの体験を指しています。新しいいのちが羽ばたくとき、卵の殻が砕かれるのです。

24. 他の地域では、家族同士を隔てる距離と望まれる帰還、つまり、シノドス的な教会としてのアイデンティティから、集団として切り離されていることを解消させるという考えこそを思い起こさせる表現が現れています。聖書のイメージを使うなら、シノドスの旅は、神の民全体に影響を及ぼす集団的な「捕囚」の経験からの帰還の第一歩を記したものであると言えるでしょう。

## 2. 聖書に耳を傾ける

25. この預言者が、生きたシノダリティの経験を通して、主が私たちに呼びかけておられることに焦点を当てて助けることばを投げかけているのは、まさに捕囚の経験を生きている民に対してです。「あなたの天幕に場所を広く取り、あなたの住まいの幕を広げ、惜しまず綱を伸ばし、杭を堅く打て」（イザヤ 54・2）。

26. 捕囚中の人々にとって、この預言者のことばは、天幕に住んでいた出エジプトの経験を呼び起こし、土地への帰還の約束、喜びと希望のしるしを告げています。その準備として、天幕を大きくすることが必要です。まず、天幕の生地は、太陽、風、雨を防ぎ、生活と和やかな空間を演出します。この布は、この空間の外側にいて、この空間に入ることを求められている人たちをも守ることができるように、広げられる必要があるのです。布をつなぐ綱は、天幕の第2の構造要素です。天幕が垂れ下がらないようにするための張力と、風による動きを和らげるための柔らかさのバランスをとる必要があります。そのため、天幕が広がれば、綱を伸ばして適切な張力を保たなければなりません。最後に、杭が第3の要素です。杭は地面に固定し、その堅固さを保証しますが、天幕を別の場所に張らなければならないときは移動可能なのです。

27. 今日、イザヤ書のこのことばを聴くと、教会を天幕のように、実際、砂漠を旅する民が携行した集いのための天幕のように想像するよう導かれます。したがって、拡張でき、しかし、移動できるよう求められます。天幕の中心には幕屋、つまり、主の臨在があります。天幕の保持は杭の頑丈さによって保証されています。つまり、信仰の基本は変わることなく、つねに新しい地に移動して植えられるので、天幕は歴史の中を歩く民に同行できるのです。最後に、天幕が垂れ下がらないようにするためには、天幕の構造は、それが受けるさまざまな力と緊張のバランスを保たなければなりません。このように、多くの報告書は教会をイメージしています：広々とした、しかし均質ではない住居、すべての人を保護することができる、しかし開放されていて、出入りできる（ヨハネ 10・9 参照）、御父とすべての人類を抱きとめる方向へと進むのです。

28. 天幕を広げるには、他者を迎え入れ、その多様性に対応する場を作ることが必要です。そのためには、愛のゆえに自己を捨て、キリストと隣人との関係の中で、またその関係を通して、再び自分を見いだす意志を持つことが必要です。「はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ」（ヨハネ 12・24）。しかし、この死は消滅ではなく、聖霊を通してキリストに満たされるために自分を無にする経験であり、したがって、わたしたちがより豊かな関係、神と互いにより深い絆を受け取るプロセスなのです。これは恵みの場であり、変容の場です。ですから、使徒パウロは次のように勧めています。「互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になりました」（フィリピ 2・5-7）。このような条件のもとで、教会の信者は、一人ひとりが、また全員が一緒になって、聖霊と協力して、イエス・キリストがその教会に割り当てた使命を果たすことができるのです。それは典礼的、聖体的行為なのです。

### 3. 宣教するシノドスの教会を目指して

29. 聖書にある天幕のイメージは、多くの報告書に登場する他のイメージ、つまり、家族のイメージや自宅のイメージと関連しています。それは、人々が帰属したい、戻りたいと願う場です。「教会の家には閉ざされた扉はなく、絶えず広げられる境があるだけです」(イタリア司教協議会)。「家」と「捕囚」、「帰属」と「排除」のダイナミズムは、報告書の中に緊張感として感じられます。「教会に居心地の良さを感じている人は、そう感じない人はいないと思っている」(アイルランド司教協議会)と述べる人もいました。これらの声を通して、わたしたちは「多様性の中で一致を生きる、グローバルでシノド的な教会という夢を聞くことができます。神は何か新しいものを用意しており、わたしたちは協力しなければなりません」(男女修道会連盟)。

30. 多様性とそれが生み出す緊張関係に対応する上で、教会が直面する二つの主な霊的な誘惑を回避している点で、そうした提案は励みになります。一つ目の誘惑は、対立の中に閉じ込められ、視野が狭まり、全体に対する感覚が失われ、下位の属性に分裂してしまうことです。これは聖霊降臨ではなく、バベルの塔の体験で、わたしたちの世界の多くの特徴によく見受けられます。もう一つは、霊的に孤立し、関係する緊張状態に無関心になり、旅で身近な人と関わることなく、自分の道を進み続けることです。そうするのではなく、「イエスのように、真理といつくしみとの緊張関係をよりよく生きることが求められています。……その夢は、キリスト論的逆説をより完全に生きる教会のもので、大胆にその本物の教えを告げ知らせると同時に、司牧し識別しながら寄り添うことを通して、根本的に包摂し受容するというあかしを提供するのです」(イングランド・ウェールズ司教協議会)。

31. イエスの教えに従い、根本的な包摂、帰属意識の共有、深いもてなしが提供できる教会、というビジョンが、シノドスの歩みの中心にあります。「他者を食卓から排除しようとする門番のような振る舞いをする代わりに、わたしたちは、誰もがここに居場所と家を見つけることができることを人々に知らせるためにもっと努力する必要があります」(米国のある小教区グループの発言)。わたしたちは、あらゆる場所、とくに馴染みのある地域の外に出て、「もてなしをする側の居心地のよい場を離れて、人類の旅の同行者である人々の存在の中に歓迎されるように」(ドイツ司教協議会)なることが求められているのです。

#### 3. 1. 耳を傾けることが歓迎することになる

32. この旅において教会は、より大きな包容力、すなわち広げられた天幕への道は、漸進的なものであることを理解してきました。それは耳を傾けることから始まり、態度と組織のより広範で深い回心、そして司牧上の同伴への新しいアプローチを必要とします。それは、周縁部分こそが、福音をより決定的に実践せよという呼びかけと同時に、回心を促す呼びかけが響く場となりうることを理解する心構えができていることから始まります。耳を傾けるには、わたしたちが他者を、自分自身の旅の主体として認識することが必要です。わたしたちがそうするとき、他の人々は批判されるのではなく、歓迎されていると感じ、自分の霊的な旅を自由に共有することができるのです。このことは多くの文脈で経験され、ある人々にとっては、この歩み全体の中でもっとも大きな変革となる面でした。シノドスの経験は、教会の中で十分に認められていないと感じている人々にとって、承認の道として読み取ることができます。これはとくに、以前は組織としての教会

が自分たちの信仰経験や意見に関心をもっていないと感じていた信徒男女、助祭、男女奉献生活者にとって当てはまることです。

33. 報告書はまた、深く耳を傾け、それによって変容されることを受け入れることの難しさについて考察しています。彼らは、耳を傾けることと識別の共同体的なプロセスの欠如を強調し、この分野でのより多くの訓練を求めています。さらに、独裁的傾向を助長する位階構造、個人を孤立させ、司祭と信徒の関係を断片化する聖職者主義的・個人主義的文化、裕福で教育を受けた人を利する社会文化的、経済的格差、相互に分裂したグループのメンバー間の出会いを促す「中間的」空間の不在など、構造的障害が根強いことを指摘します。ポーランドの報告書では、「耳を傾けないことは、誤解、排除、疎外につながります。さらに結果として、閉鎖性、単純化、信頼の欠如、恐怖心を生み出し、共同体を破壊してしまうのです。司祭が話を聞こうとしないとき、たとえば、多くの活動の中で言い訳をしたり、質問に答えてもらえないとき、信徒の心の中に悲しみと疎外感が生まれます。耳を傾けなければ、信徒の困難に対する回答は文脈から切り離され、彼らが経験している問題の本質には触れられず、空虚な道德主義となってしまうのです。真摯に耳を傾けることから逃げるのは、司牧的関わりをもつことを恐れているからだ、信徒たちは感じています。司教が信徒と話したり聞いたりする時間がないときにも、同じような感覚が芽生えます」。

34. 同時に報告書は、耳を傾けられ、支えられ、評価されていると感じられない多くの聖職者の孤独と孤立に心を砕いています。おそらく報告書の中でもっとも目立たない声の一つは、司祭と司教たちの声であり、彼らがともに歩んだ自分たちの経験について語っているものです。聖職者が、情緒的、性的生活のさまざまな側面について話し合えるように、とくに注意深く耳を傾ける機会が提供されるべきです。また、独身の誓願を破った司祭の相手女性やその子どもたちに対して、適切な形での歓迎と保護を確保する必要があることも指摘されています。そうしなければ、彼らは深刻な不公平や差別を受ける危険にさらされています。

#### ◎若者、障害者、いのちの擁護のための選択

35. シノドスの歩みにおいて、また、教会生活において、若者の声がほとんど存在しないことについては、世界中で懸念があります。若者、彼らの養成と同伴に改めて焦点を当てることは、「若者、信仰、そして召命の識別」に関する前回のシノドス（2018年）の結論を実行する方法としても、緊急に必要なことです。その際、今日の信仰の継承の観点から、よりシノドス的な教会の必要性を提起したのは、まさに若者たちでした。「デジタル・シノドス」の取り組みは、若者の声に耳を傾ける重要な試みであり、福音宣教のための新たな知見を提供するものです。アンティル諸島(カリブ)の報告書は、「若者はひどい疎外感を味わっているので、若者の優先的選択を実行する必要がある」と述べています。

36. 数多くの報告書が、障害者に伴う適切な組織や方法の欠如を指摘し、彼らの貢献を歓迎し、彼らの参加を促進する新しい方法を求めています。自らの教えにもかかわらず、教会は、社会が彼らを脇に追いやる方法を真似る危険にさらされているのです。「差別の形態として挙げられているのは、話を聞いてもらえないこと、どこで誰と暮らすかを選ぶ権利の侵害、秘跡の拒否、魔術の告発、虐待など、障害者に対する拒絶の文化を表しています。それらは偶然に生じたものではなく、同じ根源をもっています。障害者のいのちは他の

ものより価値が低いという考えです」(いのち・信徒・家庭省による「障害者の特別シノドス」の報告書)。

37. 同様に顕著なのは、そのすべての段階で、もろく脅かされやすいいのちを守ることへの、神の民の責任です。たとえば、ウクライナ・ギリシャ典礼カトリック教会にとっては、「女性の移住移動の現象を研究すること、さまざまな年齢層の女性に支援を提供すること、ウクライナの物質的貧困と家族からの拒絶を恐れて中絶を決意する女性に特別な注意を払うこと、人生の難しい時期を経験したときに、責任ある選択を求められる女性の間で、胎児のいのちを守り、中絶を防止する目的で教育活動を行い、中絶後症候群の女性の世話をすること」が、シノダリティの一部なのです。

◎無視され、排除されていると感じている人々の声に耳を傾けること

38. 報告書は、多くの共同体がすでにシノダリティを、教会から追放されたと感じている人々の声に耳を傾けるための招きとして理解していることを明確に示しています。追放されたと感じているグループは多様で、自分たちのたまものと能力が認められていないと感じている多くの女性や若者をはじめとして、多くの人々がいます。彼ら自身の間でも極めて異質であるこうしたグループの中では、多くの人が否定され、無視され、誤解されていると感じています。「故郷」を恋しく思うのもまた、第二バチカン公会議の典礼の発展に伴い、安らぎを感じられなくなった人たちの特徴です。多くの人々にとって、真剣に耳を傾けてもらうという体験は変革をもたらすものであり、自分も包摂されていると感じるための最初の一步となります。一方、シノドスへの参加が歓迎されないと感じる人がいることは、悲しみの源であり、これは、理解と対話を必要とする感情です。

39. より有意義な対話と歓迎の場を求める人々の中には、さまざまな理由から、教会への帰属と、自身の愛情にかかわる関係性の間に緊張を感じている人々もいます。例えば、再婚した離婚者、シングル・ペアレンツ、一夫多妻の結婚生活を送っている人々、LGBTQの人々などです。報告書によると、こうした人々の受け入れの要求が多くの方教会でいかに課題となっているかがわかります。「人々は、教会が完璧を求める機関ではなく、傷ついたり壊れたりした人々の避難所となることを求めています。教会は、人々がどこにいても面会し、裁くのではなく、彼らとともに歩み、優越感のためではなく、思いやりと真心によって真の関係を築くことを望んでいます」(米国司教協議会)。彼らはまた、どのように対応すべきかについての不確実性を明らかにし、普遍教会の側で識別の必要性を表明しています。「教会には新しい現象があり、レソトでは全く新しい現象である同性婚関係です。……この新しさは、カトリック教徒にとっても、それを罪と考える人々たちにとっても不安なものです。驚くことに、レソトには、この行動を実践し始め、教会が自分たちとその行動を受け入れることを期待しているカトリック教徒がいるのです。……このような人々は排除されていると感じているので、これは教会にとって問題となる課題です」(レソト司教協議会)。聖職から離れて結婚した人々もまた、より歓迎され、より積極的に対話する教会を望んでいます。

40. 文化的な違いにもかかわらず、社会とキリスト教共同体の中で排除されていると思われる人々に関しては、さまざまな大陸間で顕著な類似性が見られます。多くの場合、彼らの声はシノドスの歩みから欠落しており、彼らが報告書に登場するのは、他の人々が彼らについて話し、彼らの排除を嘆くためだけです。

「ボリビアの教会として、わたしたちは周縁部やもっとも辺ぴな場所にいる貧しい人々に、効果的に手を差し伸べることができなかったことを悲しんでいます」(ボリビア司教協議会)。もっとも頻繁に言及される排除されたグループの中には、もっとも貧しい人々、孤独な高齢者、先住民族、帰属先をもたず不安定な生活を送る移住者、ストリート・チルドレン、アルコール依存症者と麻薬依存症者、犯罪の陰謀に陥った人々、売春がその生存の唯一のチャンスに思える人々、人身取引の犠牲者、(教会とそれ以外の)虐待の生存者、囚人、人種、民族、性別、文化、セクシャリティのために差別や暴力を受けているグループなどが含まれます。報告書の中では、それらすべてが顔と名前をもつ人として登場し、連帯、対話、同行、歓迎を呼びかけています。

### 3. 2. 宣教のための姉妹と兄弟

41. 教会は、「わたしが来たのは、羊がいのちを受けるため、しかも豊かに受けるためである」(ヨハネ 10・10) といういのちの充満の告げ知らせをもたらすものです。福音書は、いのちの充満と神の国の充満の状態を、別個の現実や活動領域としてではなく、つねに動的に絡み合った運動として示しています。教会の使命は、みことばを読み、秘跡を祝い、傷ついた人や苦しんでいる人をケアするすべての行動を通して、キリストを民のただ中に現存させることです。「この必要性に応えるためには、教会のすべての人が回心の歩みに入る必要があること、それは、基本的な宣言としてのケリグマを提案し、わたしたちのために十字架につけられ、復活させられたキリストに耳を傾けることです。……それゆえ、キリスト教生活の本質とわたしたちの最初の愛に立ち戻り、すべてのものを共有していた、初代教会の共同体というわたしたちのルーツに立ち返ることが重要なのです」(コスタリカ司教協議会)。

42. 使命を果たすために、わたしたちはキリスト教召命の大きさに合わせて成長します。わたしたちの天幕を拡大することがこの宣教活動の中心にあります。したがって、シノダリティを実践する教会は、世界に対して強力に福音をあかしします。「わたしたちがともに歩み、もっとも遠くにいる人々に手が届くようになるために、聖霊は、戦略、公約、献身、動機の刷新を促しています。それは、熱意と喜びをもって神のことばを広め、才能、たまもの、技術を活用し、新しい課題を受け入れ、福音と教会生活の光の中で文化の変化を生み出すことによって、です」(ベネズエラ司教協議会)。この報告書には、そのような教会の夢が込められています、世界の課題に深く関わり、具体的な変革を通してそれに応えることのできる教会です。「世界は『出向いていく教会』を必要としています。それは、信者と非信者の間の分裂を断ち切り、人類に目を向け、教義や戦略以上のもの、救いの経験、人類と自然の叫びに応える『贈り物の一撃』を提供する教会です」(ポルトガル司教協議会)。

#### ◎今日の世界における教会の使命

43. シノダリティは、全人類家族とともに歩むための神からの呼びかけです。多くの場所で、キリスト者は他宗教の人々や信者でない人々の中に住み、日常生活や共同生活の交流の中で形成される対話に入っています。「アフリカの伝統的な宗教を実践している人たちとも、その他のあらゆる人や地域社会とも、その宗教の宗派を問わず、対話の社会的風土が培われています」(セネガル、モーリタニア、カーボベルデ、ギニアビサウ司教協議会)。しかし、社会的、文化的、霊的、知的な交流や協力という点では、まだ長い道のりが残って

いることが報告されている。

44. 教会の傷は世界の傷と密接に結びついています。報告書は、教会生活の中で、また世界の中で、部族主義、宗派主義、人種差別、貧困、ジェンダーの不平等という課題について語っています。ウガンダは他の多くの国々と同様に、教会の構造について次のように指摘しています。「富裕層と高学歴者は他の人たちよりも耳を傾けている」と指摘しています。フィリピンの報告書は、「恵まれない人々や社会から疎外されている人々の多くが、教会の中でも取り残されていると感じている」と指摘しています。他の報告書では、民族差別と部族主義に基づく文化が教会共同体の生活に与える影響について言及しています。これらの現実は、わたしたちの宣教の背景を形成するだけでなく、その焦点と目的をも規定します。教会がのべ伝えるべき福音のメッセージは、人類と被造物を捕えている罪の構造をも回心させなければならないのです。

45. 神の民は、貧しい人々の叫びと地球の叫びを聞きたいという深い願望を表明しています。とくに、報告書は、社会と環境の課題が相互に関連していることを認識し、他のキリスト教諸派、他の宗教の信者、およびすべての善意の人々と協力し、同盟を形成することによって、それらに対応するようわたしたちを招いています。新たなエキュメニズムと諸宗教間の取り組みに対するこうした要請は、社会環境的な損害に対する、より大きな脆弱性とより顕著な不平等という特徴をもつ地域においてとくに強いものです。たとえば、アフリカと環太平洋地域の多くの報告書は、世界中の教会に社会環境問題への取り組みがもはやオプションではないことを認識するよう求めています。「わたしたちの人々の幸福は多くの点で海に依存しているので、神の創造のうち、この部分を保護することはわたしたちの願いです。わたしたちの国の中には、気候の変化がこれらの国の実際の生存に劇的な結果をもたらすため、海が大きな脅威となっている国もあります」(パシフィック司教協議会)。

46. いくつかの報告書は、公共圏における教会の役割の重要性、とくに平和構築と和解のプロセスに関連した役割の重要性を指摘しています。激しく分裂した社会では、これはしばしば宣教の重要な部分と見なされており、他の報告書では、公共圏における正義のための議論や行動に、教会がもっと自信をもって貢献できるようにと呼びかけています。また、教会の社会的な教えの中で、より大きな養成が望まれています。「わたしたちの教会は、対立するために招かれているのではなく、……すべてのレベルにおいて対話と協力のために招かれています」(アルメニア典礼カトリック教会)。

47. 多くの報告書に共通するさらなるテーマは、深いエキュメニカルな関与の弱さであり、社会的、環境的正義のための共通の懸念に具体的、日常的な協力から始まる、エキュメニカルな旅に新しいいのちを吹き込む方法を学ぼうとする望みです。キリスト者の間や信仰共同体の間でより団結したあかしは、熱烈な願望として表現されています。

#### ◎すべてのキリスト者とともに歩む

48. エキュメニズムへの招きは、しかし、単に共通の社会的関与に向けられたものではありません。多くの報告書は、キリスト者間の一致なくして完全なシノダリティはありえないことを強調しています。これは、

異なる典礼の教会間のより緊密な交わりへの呼びかけから始まります。第二バチカン公会議以来、エキュメニカル対話は進展してきています。「中央アフリカ共和国の現実の生活の中では、異なる宗派のキリスト教徒の間に『ともに生きる』ことは自明であり、わたしたちの隣人、わたしたちの家族、わたしたちの葬儀場、わたしたちの職場は、エキュメニズムの現実の場所です」(中央アフリカ共和国司教協議会)。しかし、教会でシノドス的な組織や奉仕職に関連する多くのエキュメニカルな問題はまだ十分には表現されていません。報告書はまた、迫害がキリスト者を団結させ続ける「殉教のエキュメニズム」があることに注意してください。報告書は、たとえば、共同陪餐(ミサ)の問題のような、分裂の現実により大きな注意を求めています。

49. また、報告書は、異宗婚、混宗婚家族の数の増加という微妙な現象を指摘しており、同伴という点で、彼ら特有のニーズがあることを指摘しています。断片化された世界における証人として、対話と同伴への専心を活性化するには、司教、司祭、男女奉献生活者、男女信徒の間にエキュメニカルおよび諸宗教間対話のための自信、能力と動機を増加させるような、的を絞った養成が必要です。「インドのカトリック教会は、エキュメニカルな対話と諸宗教間対話を促進しようと試みてきましたが、この領域での使命は最小限であるという思いがあります。対話の努力はほんの一握りのエリートを引きつけ、思想や概念の領域に限定された頭脳的な訓練にとどまり、大衆の運動とはならず、また、さまざまな信仰やイデオロギーの人々が共通の目的のために識別し、計画し、ともに働くことによって、現場レベルでのいのちと愛と行動の対話となることはありませんでした」(インド司教協議会)。

#### ◎文化的背景

50. 数多くの報告書が、教会が特定の文化的背景の中で福音をのべ伝えるという使命を果たしており、深遠かつ急速な社会的変化の影響を受けていることを認識することの重要性を強調しています。その要因はさまざまですが、参加するための重要な課題を生み出し、教会の宣教の現実を形作っています。宗派主義、部族主義、民族国家主義の遺産は、多様な場所で異なる形で表現され、経験されますが、教会のカトリック性の表現を狭めるという同じ特徴の脅威を共有しています。

51. 多くの地方教会は、虐待の危機から生じた信頼と信用の欠如の影響について懸念を表明しています。また、個人主義や消費主義が文化的に重要な要因であると指摘する人もいます。「わたしたちの国でさえも、世俗化の進行、個人主義、宗教の組織形態に対する無関心によって、福音の告知が挑戦を受けていることを日々感じることができます」(ハンガリー司教協議会)。マルタの報告書は、他の多くの報告書と同様に、教会と政治権力の間歴史的なもつれが、宣教の状況に影響を与え続けていることを強調しています。多くの教会は、これらの文化的な課題に同時に直面していると感じていますが、「持続可能性、公平性、生活満足度を確保することができない消費主義社会」(アイルランド司教協議会)の中で福音をのべ伝えることに、ますます自信を深めていきたいと願っています。また、自分たちの中で複数の立場を経験している人もいます。「南部アフリカは世俗化、個人化、相対主義という国際的な傾向の影響を受けています。中絶、避妊、女性司祭、妻帯司祭、独身制、離婚と再婚、聖体の秘跡、同性愛、LGBTQIA+に関する教会の教えなどの問題が、地方と都市の教区の両方で提起されました。当然、これらの諸課題にはさまざまな見解があり、共同体としての明確なスタンスを示すことはできません」(南アフリカ司教協議会)。多くの報告書は、家庭が経験する圧力



と、その結果生じる世代間の関係や信仰の継承への影響について、とくに遺憾と懸念を表明しています。アジアの報告書の多くは、文化的条件の変化に対応するために、家庭へのよりよい同伴と養成を求めています。

52. 信仰のあかしが殉教の域に達している状況もあります。キリスト者、とくに若者たちが、他の宗教への組織的な強制改宗という課題に直面している国もあります。迫害されている少数派キリスト者が争わなければならない危険な状況や暴力を強調する報告も多くあります。このような場合に、分離の壁の後ろに退くのではなく、他の宗教の人々とともに歩むためには、預言の勇気が必要です。

#### ◎諸文化、諸宗教と対話

53. それはまだ大きく深化し、よりよい理解を必要とするものですが、シノドスの教会の本質的な要素の一つは、より意味のある異文化間アプローチへの招きです。このアプローチは、他者とともに歩み、文化的違いを認め、それらの特殊性をわたしたちの成長を助ける要素として理解することから始まります。「カンボジアのカトリック教会と仏教僧、そしてカンボジアの一般仏教徒との出会いは、『新しい文化を創造』します。わたしたちのすべての活動は互いに影響し合い、全世界に影響を及ぼします。わたしたちは宗教は違っても、共通善を求めているのです」(ラオス・カンボジア司教協議会)。このことをもっとも強く経験しているのは、自分たちが生活している文脈の中で少数派を代表している教会です。「たとえば、わたしたちの教会には『多孔性』と呼ぶべきものがあり、市民社会との境界線は逆説的に他の地域ほど顕著ではありません。……教会の『内側』あるいは『外側』で物事を行うという問題はありません。なぜなら、わたしたちはつねに『他者の家』にいるからであり、このことがわたしたちに耳を傾けること、柔軟性、そして養成、言語、実践における創造性を教えてくれたからです」(北アフリカ地域司教協議会-CERNA)。

54. しかし、わたしたちが他者を受け入れ、あるいは理解するようになったとしても、その旅はまだ不完全です。教会の異文化間アプローチは、キリストがわたしたちに呼びかけている神の国という地平を目指しています。豊かな多様性を受け入れることで、わたしたちはより深い一致を見だし、神の恵みと協力する機会を得ることができるのです。「わたしたちはまた、大家族や旅の仲間である非カトリック信者、政治家、無信仰者の考えや意見に耳を傾けるべきです。これらの声は、わたしたちが避けて通ることのできない身近な声であり、彼らを通しての神のささやきを見逃してしまわないようにして」(ジンバブエ司教協議会)。これは、一致の中の多様性を真の召命と見なすのに苦労している世界の中で、あかしとなるものです。「共同体は……多様性、願望、ニーズ、そして信仰を生きる方法をもっと考慮しなければなりません。普遍教会は一致の保証人であり続けなければなりません、各教区は地元で信仰をインカルチュレートすることができます。分散化が必要なのです」(ルクセンブルク教区)。

55. かなりの数の報告書において、地域文化の豊かさをよりよく認識し、関与し、統合し、対応することが求められています。その多くは、世界観と行動様式がシノドス的なのです。人々は、地域の文化を促進し(場合によっては回復し、深化させ)、信仰と統合し、典礼に取り入れることを望んでいます。「この文脈では、キリスト者は、新しい文化的文脈の中で信仰を文化化するために、自分自身の信仰のビジョンから出発して、自分自身の貢献を提供するように求められています。……このような多様なアプローチは、異文化間交流の

モデルの実践と見なされるべきで、そこでは、異なる提案が互いに補い合い、豊かにし、文化の境界の中に閉じられた文化の単純な並置からなる多文化性を超えるものです」(教皇庁文化評議会の提出文書)。

56. 多くの場合、報告書はとくに先住民族の状況に注意を払うよう求めています。彼らの霊性、知恵、そして文化には、教わるべきことがたくさんあります。わたしたちは、これらの人々とともに歴史を読み直し、教会の活動が彼らの不可欠な人間的成長のために役立つ状況からインスピレーションを得、教会がかえって彼らの抑圧に加担してしまった時代のことにゆるしを請う必要があります。同時に、文化的慣習や伝統的信仰と教会の教えの間に存在する明らかな矛盾を調整する必要性を強調する報告書もあります。より一般的なレベルでは、シノダリティの実践、つまり、交わり、参加、宣教は、識別と次世代育成能力を促進する緊張感の中で、地域の文化や文脈の中で明確にされる必要があります。

### 3. 3. 交わり、参加、そして共同責任

57. 教会の使命は、洗礼を受けたすべての人々の生活を通して実現されます。報告書は、教会における生活と務めを刷新するための基礎として、この共通の尊厳を認識し、再確認したいという深い願いを表明しています。また、教会におけるすべての召命の価値を確認し、何よりも、いやしと和解と解放をもたらす手段として、権力と権威を行使するイエスの仕方と方法に立ち返り、イエスに従うよう招いています。「一人だけで行う運営を特権化するピラミッド型の権力を解体する教会的パラダイムとして、シノダ的組織モデルを構築することが重要です。教会における唯一の正当な権威は、主の模範に従った、愛と奉仕の権威でなければなりません」(アルゼンチン司教協議会)。

#### ◎聖職者主義を超えて

58. 報告書の論調は、反教権主義的(司祭や役務的祭司職に反対する)ではありません。多くは、忠実で献身的な司祭への深い感謝と愛情を表明しており、司祭が直面する多くの要求に対する懸念も表明しています。また、司祭がよりよく養成され、よりよく同伴され、孤立することがないようにとの願いも述べられています。彼らは、司祭と信徒を含むすべての構成員が共通の使命を果たすことができるように、教会から聖職者主義を取り除くことの重要性を示唆しています。聖職者主義は、霊的貧困の一形態、叙階された奉仕者の真の財産の喪失、さらに、聖職者を孤立させ信徒に害を与える文化であると見なされています。この文化はわたしたちを神の生きた体験から引き離し、洗礼を受けた人共通の関係性に害を与え、硬直化、律法主義的権力への執着、奉仕というより権力である権威の行使を生み出します。中央アフリカ共和国からの報告書が強調しているように、聖職者主義は聖職者と同様に信徒にとっても誘惑となりえます。「小教区司祭の中には、誰の意見も聞かずに自分の意志を押し通す『命令者』のような振り舞いをする人もいます。信徒は自分たちが神の民の一員であると感じられないのです。あまりにも『聖職者主義』的な取り組みは嘆かわしいことです。司牧担当者の中には、聖職者であれ、信徒であれ、自分と同じ意見をもつ人々と一緒にいることを好み、自分と敵対し、意見が対立する信念をもつ人々から遠ざけたがる人もいます」。

59. 問題に対する率直な診断ではあるものの、報告書は絶望的なものではありません。報告書では、司祭、司教、修道者、信徒など、関係性重視で協力的なリーダーシップの形態と、連帯と共同責任を生み出すこと

のできる権威の形態を新たに求める、深く熱量のこもった願望が表明されています。「権威者の任務には、教会生活への参加を奨励、関与、指導、促進し、……責任の一部を委譲することが含まれます」(スロバキア司教協議会)とあります。信徒、修道者、聖職者は、自分たちの才能と能力を教会のために自由に使ってほしいと願い、そのために、彼らに自由さを与えるような指導性の行使を求めます。報告書では、すでにそのような形で役割を発揮している指導者たちに感謝の意を表しています。

#### ◎女性の参加について再考する

60. 世界の救いのために、教会文化の回心を求める声は、具体的には、新しい実践と制度をもった、新しい文化の確立の可能性と結びついています。この点で重要かつ緊急な領域は、女性の役割とその召命についてです。それは、わたしたちの共通の洗礼の尊厳に根ざすもので、それによって教会生活に完全に参加できません。この問題に対する意識と感受性の高まりは、世界中で記録されています。

61. すべての大陸から、カトリックの女性が、洗礼を受けた神の民の平等なメンバーとして、何よりもまず評価されるようにという訴えがあります。女性たちが教会を深く愛していることはほぼ満場一致で肯定されていますが、彼女たちの生活がしばしばよく理解されず、彼女たちの貢献やカリスマが必ずしも評価されていないことに悲しみを感じている人が多くいます。聖地からの報告書はこう記しています。「シノドスの歩みにもっとも熱心に取り組んだのは女性たちでした。彼女たちは、預言者の端を任せられることによって、そこから教会生活の中で起こることを観察することで、より多くを得るだけでなく、より多くのものを提供できるということに気づいたようです」。そして、こう続けます。「ほとんどすべての意思決定者が男性である教会では、女性が声を上げることができる場はほとんどありません。しかし、女性は教会共同体を支える存在であり、実践的な信者の大部分を占め、教会の中でもっとも活動的なメンバーなのです」。韓国の報告書では、次のように確認されています。「教会のさまざまな活動に女性が参加しているにもかかわらず、重要な意思決定プロセスから排除されていることは多い。したがって、教会は彼女たちの活動に対する認識と制度的側面を改善する必要があります」(韓国司教協議会)。教会は二つの関連した課題に直面しています。それは、典礼にあずかり、活動に参加する人の多数派は依然として女性であり、男性は少数派であること、そして、ほとんどの意思決定と統治の役割は男性が担っていることです。教会は、男性をより積極的に教会に参加させる方法と、女性が教会生活のあらゆるレベルでより完全な形で参加できるようにする方法を見つけなければならないことは明らかです。

62. 女性は生活のあらゆる領域で、教会に自分たちの支持者であることを求めます。これには、世界中の女性が直面している貧困、暴力、侮蔑などの社会的現実に取り組むことも含まれます。彼女たちは、自分たちの側に立つ教会、そして、これらの破壊と排除の力と闘うためのより大きな理解と支援を求めています。シノドスの歩みに参加している女性たちは、教会と社会がともに繁栄し、積極的な参加と健全な帰属の場であることを望んでいます。いくつかの報告書は、自国の文化がすでに女性の包摂と参加について進展があり、それは教会にとって模範となるような進歩であると指摘しています。「このような教会内の女性の平等の欠如は、現代世界における教会の障害と見なされています」(ニュージーランド司教協議会)。

63. この問題はさまざまな形で、文化的背景を越えて存在し、女性修道者と同様に女性信徒の参加と承認に関係しています。修道会の長上たちからの報告書は次のように指摘しています。「教会における意思決定や言葉遣いに性差別が蔓延しています。……その結果、女性は教会生活における有意義な役割から排除され、その奉仕職や仕事に対して公正な賃金を受け取れないという差別を受けています。女性修道者は安い労働力とみなされることが多いのです。ある教会では、女性を排除し、教会の中の役割を終身助祭に任せる傾向もあります。さらに、洗礼を受けたすべての男女キリスト者の基本的平等と尊厳を尊重せず、修道服を着ない修道生活を過小評価する傾向さえあります」（男女修道会連盟）。

64. ほぼすべての報告書が女性の完全かつ平等な参加という問題を提起しています。「教会生活における女性の重要性に対する認識の高まりは、教会の諸機関や意思決定の領域において、限定的ではあるものの、より大きな参加の可能性を開いています」（ブラジル司教協議会）。しかし、報告書は、教会と社会における女性の召命、包摂、繁栄という問題に対する単一の、あるいは完全な回答について同意しているわけではありません。注意深く耳を傾けた後、多くの報告書は、教会組織の統治機構における女性の積極的役割、十分な訓練を受けた女性が小教区で説教する可能性、そして女性助祭といった一連の具体的な質問に関して、教会が識別を続けるよう求めています。女性の司祭叙階というテーマについては、より多様な意見が表明され、ある報告書はそれを要求し、他の報告書はすでに否決された案件とみています。

65. このプロセスの重要な要素は、女性、とくに女性修道者が、わたしたちが直面するもっとも困難な社会状況のいくつかにおいて、すでにシノドス的実践の最前線に立っているそのやり方を認識することにあります。男女修道会連盟が提出した文書は次のように記しています。「わたしたちが連帯して新たな地平を切り開く、次に挙げるようなシノダリティの種があります。黒人、褐色人種、アジア人、アメリカ先住民の兄弟姉妹のために人種的・民族的正義と平和の未来を保証すること（米国）、先住民族や土着の姉妹や兄弟と深くつながること（南北アメリカ大陸）、多様な運動における修道女の活躍に新たな道を開くこと、主要な社会問題（気候変動、難民や亡命者、ホームレス問題など）や特定の国々の課題に取り組む同じ考えのグループと連携すること」。こうした状況の中、女性は協力者を求め、より幅広い教会活動の中でシノダリティの教師とされます。

#### ◎カリスマ、召命、奉仕活動

66. 教会のシノドス的生活に対する責任は委任されるものではなく、霊が信者に授けるたまものに応じて、すべての人が共有しなければなりません。「ラエ教区のあるグループは、自分たちの小教区のシノダリティについて次のようにコメントしています。『わたしたちの小教区の司牧評議会では、小教区のすべての人々の生活に影響する決定を下す前に、すべての人々の意見・提案、さらにまた女性たちの意見・提案を取り入れるのを見ています』。また、別の小教区では、『わたしたちの小教区で何かしたいときは、みんなで集まって、地域のみんなの提案を聞いて、みんなで決めて、みんなで実行します』とのコメントもありました」（パプアニューギニア・ソロモン諸島司教協議会）。しかし、実際に共同責任を実践することの難しさを示す表現にも事欠きません。「わたしたちは司教として、宣教における共同責任の基礎となる、第二バチカン公会議が推進した『洗礼の神学』が十分に発展していないため、洗礼を受けた大多数の人が教会との完全な同一性を感じ

ておらず、宣教の共同責任も感じていないことを認識しています。さらに、現在の司牧組織の指導者層と多くの司祭のメンタリティは、この共同責任を育むものではありません。同様に、男女修道者、信徒使徒職運動体も、しばしば目立たない形で、あるいは公然と教区の諸活動の周辺部にとどまっています。このように、小教区のいわゆる『献身的な信徒』（もっとも数が少ない）は、結局、彼らの力を超え、彼らの時間を使い果たすような教区内の責任で過重な負担を負わされています」（メキシコ司教協議会）。

67. この共同責任への願いは、まず第一に、共通の使命に向かう奉仕の鍵のうちに、つまり、奉仕職の性質（ministeriality）を表す言語をもって、根拠づけられるようになります。イタリアの報告書が言うように、「この経験は……、洗礼の尊厳から来る共同責任を再発見するのに役立ち、また、異なるカリスマと奉仕職の交わりである『万人祭司職』の教会へ向かうために、叙階を受けた奉仕者を中心とした教会というビジョン克服の可能性を出現させたのです」。教会生活の中心としての奉仕職というテーマと、宣教を多様な奉仕職と統合させることを明言する必要性が、神の民への意見聴取から浮かび上がってきます。それを認識し、促進することは、「ここではそれ自体が目的ではなく、宣教の奉仕において拡張していくことです。つまり、さまざまな行為者が、平等な尊厳をもち、しるしとなって、神の国の秘跡である教会を信頼できるものとするのです」（ベルギー司教協議会）。

68. 多くの報告書は、共同体によって効果的に委託することを可能にする、奉仕職の承認と促進のための実践に言及しています。「信徒奉仕職の推進と責任の引き受けは、定められた必要条件を備えていると考えられる信徒の選出または任命によって行われます」（モザンビーク司教協議会）。このようにして、各奉仕職は、共同体生活の組織上の要素、組織化していく要素となります。「責任の引き継ぎは、受けた委任と補完性の原理によって保証されます。カテキスタは、神の家族である教会の中で制定され、特定の地位を占めています。……とくに司祭の少ない農村部では、共同体リーダーとして『制定』されている人もいます」（コンゴ民主共和国司教協議会）。信徒奉仕職の可能な空間に関する質問には事欠きません。「多くのグループが信徒の参加拡大を望んでいますが、その余地は不明確です。信徒は具体的にどのような仕事をすることができるのでしょうか。洗礼を受けた人の責任と小教区司祭の責任は、どのように関連付けられるのでしょうか」（ベルギー司教協議会）。

69. ある状況では、諸団体、信徒運動体、新たな修道会の中で組織立った形で現れる多様なカリスマと奉仕職を考慮する必要があります。それらの特異性に注意を払い、また、それぞれの地方教会内の調和を守ることが必要です。具体的な教会生活の中に入るとき、奉仕職の性質（ministeriality）のテーマは必然的にその制度化の問題に直面します。このことは、それを通じてキリスト教共同体の生活が展開される、諸組織についての問題を提起するものです。

70. カトリック教会では、聖霊によって無償で授けられるカリスマのたまものは、教会の「若返り」を助けるものであり、さまざまな程度で叙階の秘跡と結びついている位階的たまものと切り離すことができないのです。1年目に現れたシノダリティの大きな課題は、司牧者の指導のもと、これらのたまものを互いにつけ合うことなく、したがって、教会のカリスマ的次元と組織的次元を対立させることなく、調和させるこ

とです。

### 3. 4. シノダリティが形になる

71. シノドスの歩みは、これまでの段落で明示された多くの緊張を生み出してきました。わたしたちはそれらを恐れるのではなく、継続的な共同識別のプロセスの中でそれらについて明確に語るべきであり、そうすることで、そうした緊張が破壊をもたらすものになることなく、エネルギー源として役立てることができるのです。このように、教会は、とくに統治に関して、自らの制度や組織にシノドス的な形式と進め方を与える必要があるのです。教会法は、このような組織上の刷新過程に寄り添い、現在の体制に必要な変更を加える必要があります。

72. しかし、真にシノドス的な方法で機能するためには、ビジョンとスキルの面で、よく養成された人々が諸組織に携わる必要があります。「シノドス的な実践全体は、多様なレベルにおける積極的参加の一つでした。このプロセスを継続するためには、考え方の変化と既存組織の刷新が必要です」（インド司教協議会）。この新しいビジョンは、シノダリティの実践を支える霊性によって支えられる必要があります、この現実を技術的・組織的な問題に還元することは避けなければなりません。このビジョンを共通の使命として生きることは、主と出会い、霊に耳を傾けることを通してのみ実現することができるのです。シノダリティが存在するためには、霊の現存が必須であり、祈りなくして霊は存在しません。

#### ◎諸組織と団体

73. グローバルとローカルの緊張関係——教会的な言語では、地方教会相互の関係性や、普遍教会との関係性を指す——という観点から、シノドスの歩みのダイナミズムは、まさにわたしたちが現在生きている大陸ステージによって構成された新しさをわたしたちの前に示しています。特定の歴史的ダイナミズムの特徴を有するいくつかの地域を除き、これまでのところ教会は、大陸レベルで、確立されたシノドスの実践を欠いています。シノドスの歩みに別個の大陸ステージを導入することにより、単に組織的な策略を導き出すのではなく、一定の文化的なまとまりと同質性によって特徴づけられる地域に根を張り、それぞれの文化の特質と結びついた特定の特徴をもつ教会共同体を生み出す、福音の受肉のダイナミズムに応答するのです。グローバル化し、断片化した世界の中で、各大陸は、その共通の歴史的ルーツ、社会文化的共通性の傾向、そして福音化の使命のために同じ課題を与えているという事実から、教会間のつながりを強化し、経験の共有とたまものの交換を奨励し、新しい司牧の選択肢を思い巡らすのを助ける、シノドス的なダイナミズムをかき立てるために恵まれた場です。

74. さらに、シノダリティのダイナミズムは、ローマ教皇庁そのものに課題を投げかけます。「わたしたちが定期的に意見交換しているローマ教皇庁の他の省との協力関係を思い起こすことが必要です。……しかし、この分野では、教皇が新しい使徒憲章『プレディカテ・エヴァンジェリウム』で望まれたように、ローマ教皇庁で実施されるべき、シノドス的な実践と精神をより成長させるよう促すために、より多くの手段を見つけるべきだと感じています」（教皇庁国務省外務局の提出文書）。

75. 各国司教協議会もまた、シノダリティが自分たちにとって何を意味するのかを問うています。「司教たちもまた、祈り、議論してきました。『どうすれば司教協議会をよりシノドス的にできるか。そして、どうすればそれをよりシノドス的なやり方で運営できるか』」(パラグアイ司教協議会)。たとえば、「司教協議会は、その団体性と、いかなる圧力も排除する意思決定の自由を維持しながら、シノダリティの名のもとに、その討議と会合に、さまざまな教区の聖職者と信徒代表を入れるべきです」(教皇庁國務省外交官人事局の提出文書)。

76. 大陸ステージの間、各国司教協議会は新しい役割を経験することができます。それは、自分たちの中の交わりを促進するだけでなく、地理的・文化的に近接している教会間の対話にも関連するものです。さらに、大陸ステージでは、提案されている教会や司教協議会での集いを通して、教会的なシノダリティと司教団の団体性をどのように統合するか、根拠ある実践的なことばで取り組む機会を提供することになります。また、いくつかの報告が、一定のエネルギー不足を指摘している通常の司教の奉仕職の遂行方法と、完全にシノドス的なスタイルで任務を引き継ぐこととの間の調和を改善する方法について考える機会も提供します。大陸ステージで得られた経験を振り返ることは、より円滑に進める方法を見出すのに役立つでしょう。

77. 東方典礼カトリック教会は、ラテン典礼教会よりもはるかに豊富なシノドス的組織を提供しており、それらは今日、刷新するよう求められている。「シロ・マラバル教会 (Prathinidhiyogam, Palliyogam, Desayogam) に古くから存在するシノドス的組織と教会プロセスは、地方、地域、普遍教会のレベルで、教会のシノドス的性質を表し、シノダリティに向けてわたしたちを養成するのに有効です。これらは小教区や共同体に奉仕するためのものであり、それにより、聖霊に耳を傾けながら前進するための司牧的奉仕職を協力のうちに実践する道を発見できます。さらに、教会のシノドス的組織に力を与えようとする、新たな取り組みや試みも存在します」(シロ・マラバル典礼カトリック教会)。

78. 共同責任のダイナミズムは、共通の使命を視野に入れ、それに奉仕するものであり、役割と権限を割り当てる組織的な方法としてではありませんが、教会生活のすべてのレベルを貫いています。地方レベルでは、さまざまなレベルで、さまざまな典礼に適した特異性をもって既に想定されている参加団体や、強化されたシノドス的なダイナミズムに奉仕するために設立することが適切と思われる団体が疑問視されます。「シノダリティの精神を誠実に反映する組織と構造をもつことが議論されました」(韓国司教協議会)。これらは何よりもまず司牧評議会であり、包摂、対話、透明性、識別、評価、そしてすべての人のエンパワーメントの場として、ますます制度化されるように求められています。わたしたちの時代には、これらは不可欠なものです。次に、経済問題評議会、教区評議会、小教区評議会が付け加えられ、司教を中心とする教区評議会、司祭評議会にも注意が払われるべきです。多くの報告書は、これらの機関が単に意見聴取の場であるだけでなく、民主主義体制で用いられる多数決原理ではなく、共同体の見識のプロセスに基づいて決定される場であることの必要性を示しています。

79. 世界のさまざまな地域で、透明性は、教会がより本物のシノダリティに成長するために不可欠な実践と見なされています。「カトリック教会は、もっとオープンで透明性のある教会になる必要があります。すべて

は秘密裏になされます。小教区評議会の議題や議事録は決して公開されず、財務委員会の決定は論じられず、貸借対照表も共有されません」(英国からの個人の所見)。透明性を高めることで、真に説明責任を果たすことができるようになり、識別のための基準も含めて、すべての意思決定プロセスに関わることができるようになります。シノドス的な進め方に根ざしたリーダーシップのスタイルは、信頼と信用を生み出します。「いくつかの課題については、管理、経営、司牧活動のさまざまな組織に組み込まれた諸団体との意見聴取を通じて、権限行使は事実上、団体性に基づくものです。……しかし、こう記すことは時として悲しいことですが、わたしたちのカトリック教会には、非常に権威主義的な司教、司祭、カテキスタ、共同体リーダー、……があります。……共同体に奉仕するのではなく、一方的な決定で自分自身のために奉仕する人がいて、これがわたしたちのシノドスの旅を妨げているのです」(チャド司教協議会)。さらに、多くの報告書が、経済や統治問題の運営に、適切な専門的能力をもつ人々を参加させる必要性を指摘しています。

80. すべての教会組織は、完全な参加型機関として、その組織と手順を刷新し、その機能と使命を行使する方法に、どのようにシナダリティへの呼びかけを統合しうるかを検討するよう求められています。とくに、大学や学術機関はシノダリティの課題に取り組む研究を発展させることができ、教育や養成プログラムの設計を革新するのに役立つことでしょう。とくに神学部では、シノドスの経験と実践がもたらす教会論的、キリスト論的、聖霊論的洞察を深めることができるようになるのです。

81. 真の意味でシノドス的なスタイルを採用することは、奉献生活にも課題を投げかけ、それはまさに、メンバー全員が自分の属する共同体生活に参加することの重要性をすでに強調している、という実践から始まります。「奉献生活におけるシノダリティは、識別と意思決定に影響を及ぼします。わたしたち修道会では共同識別が実践されてきましたが、改善の余地があります。ある団体のメンバーとなるためには、参加することが必要です。……共通の願いは、教会生活と奉献生活の両方において、循環型(参加型)であり、位階的・ピラミッド型ではない統治様式を確立することです」(男女修道会連盟)。

### ◎養成

82. 圧倒的多数の報告書が、シノダリティにおける養成を提供する必要性を示しています。組織だけでは十分ではない。シノダリティの文化を広く支えるために、継続的な養成が必要です。この養成は、共通の使命をより効果的に果たすという観点から、参加、権威、リーダーシップの発揮の仕方におけるシノドス的回心を促進するために、地域の状況との関係で明確に表現されなければなりません。それは単に特定の技術的、方法論的なスキルを提供するという問題ではありません。シノダリティのための養成は、キリスト教生活のあらゆる次元と交差しており、「個人的、霊的、神学的、社会的、実践的次元を含む総合的養成」となる以外にありえません。「このためには、参照する共同体が不可欠です。というのも、『ともに歩む』ことの一つの原則は、具体的な知識を超えて、人生全体を包含する心の養成だからです。シノダリティを实践するため、信仰において成熟し成長するため、社会生活に参加するため、聖体における信者の愛と参加を高めるため、安定した奉仕職を担うため、教会の統治において真の共同責任を果たすため、友愛の精神をもって遠く離れた人々を近づけるために他の教会や社会と対話するため、キリスト教生活の中に継続的かつ恒久的な養成を行うことが必要です」(スペイン司教協議会)。こうした訓練は、神の民のすべてのメンバーに対して行われ



なければなりません。「このような共同体の要素を実現するためには、聖職者と信徒のための教育・養成プログラムが緊急に必要であり、それは地方教会においてともに歩むために非常に重要な、共同体についての理解を深めるためです」(ミャンマー司教協議会)。このようにして、シノダリティの視点は、カテケージスや司牧的ケアに収斂され、それらが宣教の視点に根ざしたものとなるのです。

83. しかし、たとえばシノダリティのための機関やチームの設立などを通じて、耳を傾けることや対話のためにより的を絞った養成の必要性もまた強調されています。多くの報告書は、指導的役割を担うように招かれている人々、とくに司祭のためのシノダリティの養成を確保する必要性を指摘しています。「神学校での養成は、長い間、聖職者が司祭としての生活を送るための準備に向けられており、司牧上の調整のための養成が欠けています。司祭養成には、ともに働き、互いに耳を傾け、ともに宣教に参加するための養成と訓練が不可欠です」(スリランカ司教協議会)。

#### ◎霊性

84. 組織や制度を活性化するために不可欠なシノダリティの文化は、十分な養成を必要とし、とりわけ、主への親しみと聖霊の声に耳を傾ける能力によってはぐくまれる必要があります。「霊的識別は、戦略的な計画と意思決定を伴わなければならない、そうすれば、それぞれのプロジェクトは聖霊に受け入れられ、ともに歩んでもらえるのです」(ギリシャ・メルキト典礼カトリック教会)。そのためには、内面性と良心への配慮に基づくシノダ的霊性の中で成長しなければなりません。「個人の霊性においても、教会のメッセージにおいても、罰する神の恐れではなく、復活したキリストの喜びが勝っていなければなりません」(チェコ共和国司教協議会)。

85. すでに何度も強調されているように、まず第一に、シノダ的教会は、多様性に遭遇することから生じる多くの緊張に対処する必要があります。したがって、シノダ的霊性は違いを歓迎し、調和を促進するものでなければならない、その緊張の中から、旅を続けるためのエネルギーを引き出すのです。これを達成するためには、個人の次元を強調することから、集合的な次元、すなわち、一人ひとりの貢献を高めることができる「わたしたち」の霊性へと移行しなければならないのです。

86. シノダの旅の1年目は、提案された霊的対話の方法を通して、すでにこの方向で刺激的な経験を提供してきました。この方法によって神の民は、神のことばをめぐる個人的な出会いと、それが各人の心の中に呼び起こすさまざまな共鳴の味わいを味わうことができました。多くの人々が要求しているように、この方法を教会生活における通常の実践とすることに加えて、この方法は、とくに参加する諸団体の中で、共同識別の方向へと進化しなければなりません。このことは、教会組織の通常的生活とその統治機構の中に霊的次元を統合し、意思決定プロセスの中で識別を明確にするための、より大きな努力を必要とします。祈りと沈黙は、あたかも前文や付録であるかのように、これらのプロセスに無関係なままであってはなりません。

87. キリスト教の霊性は、東洋と西洋の間の多様な伝統と、奉献生活や教会運動体の多様なカリスマに関連して、さまざまな方法で表現されます。シノダ的教会は多様性を中心に構築され、異なる霊的伝統の間の

出合いは、交わりと調和を促進することが可能な限り、多くの教会が経験している分極化を克服するのに貢献する、養成のための「体育館」となりうるのです。

### 3. 5. シノドス的生活と典礼

88. 報告書は、多くの点でシノダリティと典礼の深い結びつきを強調しています。『『ともに歩む』中で、祈り、みことばに耳を傾ける宣教する弟子としてのマリアへの献身、レクチオ・ディヴィナ、ミサは帰属の目的を鼓舞します』(コロンビア司教協議会)。

#### ◎深くまで届く根

89. ミサは、それ自体がすでに、教会のシノドス的なダイナミズムの「源泉であり頂点」です。「ミサと祈りは、人間と霊のエネルギーを統合し、動員する力として経験されます。一般的な意見では、祈りは人生の喜びと共同体の目的をはぐくみますが、それは祈りが基準点、強さの場所、平和のオアシスとみなされるからです。……提出文書は、共同体の一致と人生の喜びという、シノドスの旅路の観点から発展させるべき二つの様式を強調しています。この旅は、偉大な典礼の集い(巡礼……)を通過し、民衆の信心を養い、信仰を更新し、帰属意識を養い、その結果、ますます目に見えて積極的になっている共同体主義と『アイデンティティの喪失』に直面して、キリスト者がいつくしみの福音を証言するよう、彼らにより近く寄り添います」(ブルキナファソ・ニジェール司教協議会)。

90. 世界のさまざまな地域の国々で、「洗礼を受けた多くの人々の教会との絆は、何よりも民衆の宗教性現象を通して伝わっています。……多くの人々はこれを教会への帰属のしるしと考えます。このためわたしたちは、キリスト教生活へより熱心に参加し、意識的に没入することを視野に入れて、(この現象を)促進し、福音化しなければなりません」(パナマ司教協議会)。

#### ◎緊張の取り扱い：刷新と和解

91. 多くの報告書は、すべての違いを歓迎し、すべての奉仕職を評価し、すべてのカリスマを認める上で、すべての信者の積極的な参加を可能にする、ミサのシノドスの様式の実施を強く勧めています。それは、司式者に集中し過ぎている典礼の再考から、信徒の積極的な参加の様式、女性の奉仕者としての役割へのアクセスに至るまで、です。「伝統、その独創性、古さ、統一性に忠実でありながら、司祭、信徒、若者、子どもなど、すべての信徒共同体が時のしるしを的確に読み取り、ミサをより生き生きとした参加型にするよう努めようではありませんか。若い人たちは、典礼の中に歌の空間をもとうとしており、それは前向きなことです」(エチオピア司教協議会)。

92. しかし、教会の現在の経験は、公会議前の典礼との関係を識別するなど、シノドス的なやり方で対処する必要のある対立のもつれを表しています。つまり、「典礼を祝うことに関する分裂はシノドスの意見聴取に反映されていました。『悲しいことに、ミサも教会内の分裂の領域として経験されています。典礼に関するもっとも一般的な問題は、公会議前のミサを行うことです』。1962年版ミサ典礼書の入手が限られていることが嘆かれています。典礼の祝い方をめぐる違いは、『時には敵意のレベルにまで達する』と多くの人が感じて

おり、『この問題のそれぞれの側の人々は、自分たちと異なる人々から裁かれていると感じると報告しています』(米国司教協議会)。聖体は、キリストにおける愛の一致の秘跡であり、対立やイデオロギー、亀裂や分裂の理由にはなりません。さらに、多くの教会生活に直接的な影響を与えると、そのような聖体の共有として、エキュメニカル圏に特化した緊張の要素が存在します。最後に、信仰養成と諸宗教対話の様式に関連する問題があり、それはミサと祈りの形態にも影響を及ぼします。

93. 報告書は、実際の祭儀のプラクシスの主な欠点を指摘することを忘れず、それがシノドスの効果を曖昧にしています。とくに強調されているのは、司祭が典礼上の主人公であるという考え方と、より広い典礼にあずかる共同体の受動性という危険、説教内容、つまり信仰の美と生活の具体性との間の距離を含む貧弱な説教、会衆の典礼生活と共同体の家族ネットワークとの間の分離、などです。説教の質については、ほぼ一致して問題として報告されています。「政治的なことではなく、福音書とその日の朗読を中心に、信者の生活に言及した、わかりやすく魅力的なことばを用いた、より深い説教」(マロン典礼カトリック教会)が求められています。

94. 聖体と他の秘跡へのアクセスがさまざまな原因によって妨害されたり、阻止されたりする状況は、とくに苦しみの原因となっています。このような形の秘跡の剥奪に対する解決策を見つけることが強く要求されています。たとえば、非常に遠隔地に住む共同体や、最貧困層を差別する祭儀への参加費用の徴収などが挙げられています。また、多くのまともな、再婚した離婚者や一夫多妻制の結婚をした人々が経験する、秘跡を受けることができない苦痛について声を上げています。「ミサへのアクセスは再婚した離婚者には否定されており、彼らはこの排除に傷ついたと表明しています。教会はもっと柔軟であるべきだという意見もありましたが、この慣習を維持すべきだという意見もありました」(マレーシア司教協議会)。

#### ◎シノドス的な典礼様式

95. 同時に、シノドスの歩みは、祈りと祝祭の形式の多様性をあらためて体験する機会でもあり、また、共同体の日常生活の中で、より身近なものにしたいという願望も高まっています。フランスの報告書は、三つの願いを表明しています。「第一は、……典礼の多様化を図り、みことばの祭儀、すなわち、聖書本文の黙想が中心となる祈りのひと時を有益にすることです。二つ目は、頻度は低いですが、巡礼と民衆の信心の重要性を喚起しています。三つ目は、多くの報告で報告されている問題、すなわち、教会が通常使用している言語の理解しにくさに対処するために、典礼の形成を新たに行うことを求めるものです」(フランス司教協議会)。 典礼が教会のアイデンティティと深く結びついている東方典礼カトリック教会においても、典礼の改革を問題視する地域があります。「わたしたちの教会では、現代における神の御業への神の民の行動と参加を聖霊の光の中で読み直すために、典礼の改革はよい機会です」(ギリシャ・メルキト典礼カトリック教会)。

96. 多くの教会はまた、ミサを、さまざまな形の対話的な分かち合いや友愛的な共生と習慣的に結びつけることの重要性を強調しています。「共生と友愛はつねに(シノドスの集いの)経験の一部でした。最初の会議から、その後の小教区や司牧組織での意見聴取に至るまで、すべての集いでサル・サロ(食事の分かち合い)が行われたのです。多くの人が、(シノドスの)集いが、ミサにいかにより良い影響を与えたかを指摘しています」

(フィリピン司教協議会)。

97. 典礼の祈りの儀式の伝統の多様性、そして多様な文化が自らを表現する象徴的な形式は、すべての人が財産であるとみなしています。霊性への新たな愛、美を大切にする姿勢、そしてシノドス的スタイルのミサは、すべて、宣教する教会の輝きを支えています。「寄せられたすべての提出文書は、個人生活、家庭生活、職業生活、近隣、地域社会そのものにおいて、インスピレーションを与え、信仰を生きる助けとなる空間としてのミサについて語っています」(ウルグアイ司教協議会)。

## 4. 次のステップ

98. シノドスの歩みの将来を見据えるには、二つの全く異なる時間的展望を考慮する必要があります。第一は、長期的な展望で、そこではシノダリティは個人の回心と教会の改革への永続的な呼びかけの形をとっています。もう一つは、明らかに前者に奉仕するもので、わたしたちが経験している「大陸ステージ」の出来事に注意を集中させるものです。

### 4. 1. 回心と改革の旅

99. 報告書の中で、神の民は、維持と保全のための教会ではなく、宣教のために出向いていく教会でありたいという願望を表明しています。一方ではシノダリティを通して交わりを深めること、他方では宣教を強化することの間に関連性が浮かび上がります。スペインの報告書が言っているように、「わたしたちは、交わりはわたしたちを永続的な宣教の状態に導かなければならないと信じています：互いに会って話を聞くこと、対話、考察、識別をともにすることは、それ自体、好ましい効果を持つ行動ですが、それらが、教会としてわたしたちに託された任務を遂行するためにわたしたち自身と参照する共同体を超えて行くよう、押し出す方向に向けられないならば理解できない」のです。

100. 神の民はともに歩むことに喜びを見出し、そうし続けたいという希望を表明しています。真にグローバルなカトリック共同体としてこれをどのように行うかは、まだ十分に発見されなければならないものです。「互いに耳を傾け、宣教に参加し、対話に参加することによって、シノドス的に歩むことは、おそらく『すでにあり、まだない』次元にあり、それはそこにありますが、もっと多くのことがなされるべきなのです。信徒は有能で、才能があり、機会が与えられれば、もっともっと貢献する意志を持っています。小教区レベルでのさらなる調査や研究は、信徒の貢献が計り知れないものとなる道を開き、その結果、シノダリティの目標である、より活気に満ちた、繁栄する教会となるでしょう」(ナミビア司教協議会)。わたしたちは学ぶ教会であり、そうであるためには、神のみことばと時代のしるしをともに読み、聖霊が指し示す方向に前進できるよう、継続的な識別が必要なのです。

101. 同時に、神の民としてともに歩むには、個人的にも共同体的にも継続的な回心の必要性を認識することが必要です。制度的、司牧的なレベルでは、この回心は、継続的な「アジュールナメント」を求める動きと同様に、教会の構造、様式を継続的に刷新することです。これは、第二バチカン公会議が残した貴重な遺産であり、その60周年を迎えるにあたって、わたしたちが注目するよう求められています。

102. 回心と改革の旅において、わたしたちは、イエスが福音書の中でわたしたちに示していることから始まるシノドスの旅の最初の1年間に受け取った贈り物に支えられています。耳を傾けることの基本である他者への自由で無償の配慮は、嫉妬深く守るべき限られた資源ではなく、尽きることなく、引き出せば引き出すほど成長する溢れる源なのです。耳を傾けることと対話は、カリスマ、職業、才能、技能、言語や文化、霊的・神学的伝統、祝賀や感謝のさまざまな形など、一つの教会の多面的な多様性を通して聖霊が与えてくださるたまものにアクセスする方法なのです。報告書は画一化を求めているのではなく、洗礼を受けた人が喜

びをもってともに歩むために必要な絆を生み出すことによって、世界における使命を果たすことができるように、誠実な調和の中で成長することを学ぶよう求めているのです。

103. わたしたちのシノドスの形式的メッセージは単純です。わたしたちは、それぞれが自分の場所を見つけることができるように、ともに歩み、一つのパンを裂くためにともに座ることを学んでいます。誰もがこの旅に参加するよう召され、誰一人として排除されることはありません。わたしたちは、すべての人にイエスの福音を信頼できる形でのべ伝えることができるよう、このように呼ばれていると感じています。これは、わたしたちが次の大陸ステージで続けようとする道です。

#### 4. 2. 大陸ステージの方法論

104. この「大陸ステージ文書」は、「シノドスの教会のために：交わり、参加、そして宣教」というこの霊的な旅においてさらなるステップを踏むようわたしたちを招き、その参照点を構成しているのです。「エマオでの弟子たちの経験が彼らの新しい使命の始まりにすぎなかったように、わたしたちのシノドスの歩みは最初の一步にすぎません」(ロシア連邦司教協議会)。大陸レベルは、わたしたちがまだ理解するために学んでいる、そして今具体的に実践するために招かれているシノダリティを実践する機会を構成しているのです。

105. シノドス1年目に世界中の神の民が述べたことを集め、地方教会に回復する「大陸ステージ文書」は、わたしたちを導き、プロセス全体を活気づける基本的な問いを念頭に置いて、わたしたちが識別を深めることができるようにすることを意図しています。「今日、さまざまなレベル(地方レベルから全世界レベルまで)で行われているこの『ともに旅をする』ことは、教会がゆだねられた使命に従って福音をのべ伝えることを可能にするでしょうか。また、シノドス的な教会として成長するために、聖霊はどのような段階を踏むようにわたしたちを招いているでしょうか」(「準備文書」2)。

106. このように、「大陸ステージ文書」は、大陸ステージの間、地方教会間および普遍教会との対話が行われるための特権的な道具なのです。この耳を傾けること、対話、識別のプロセスを追求するために、考察は三つの問いに焦点を当てます。

- 「『大陸ステージ文書』を読み、祈った後、どの直観があなたの大陸の教会の生きた経験と現実に最も強く共鳴しているでしょうか。どのような経験があなたにとって新しく、あるいは光り輝くものでしょうか」
- 「『大陸ステージ文書』を読み、祈った後、あなたの大陸の視点において、どのような実質的な緊張や相違がとくに重要であると浮かび上がりましたか。その結果、プロセスの次のステップで取り組み、検討すべき問題や課題は何でしょうか」
- 「前の二つの質問から現れたものを見て、世界中の他の地方教会と共有し、2023年10月のシノドス第1回総会で議論できる優先事項、繰り返されるテーマ、行動への呼びかけは何でしょう」

#### ◎プロセスの主なステージ

107. 各大陸総会は、その地域の状況に適した「大陸ステージ文書」に関する討議プロセスを導入し、それを

説明する「最終文書」を起草するよう要請されます。七つの大陸各総会の「最終文書」は、2023年6月までに完成する「討議要綱」の起草の基礎として使用されます。

108. シノドス事務局が送った諮問に回答した大多数の司教協議会は、神の民全体からの代表が大陸ステージに参与することを望んでいます。したがって、すべての総会は、司教、司祭、助祭、男女奉献生活者、男女信徒という神の民の多様性を十分に代表する構成となるように、単に司教の都合だけではなく、教会的事であることが要請されるのです。大陸別総会の参加者に関しては、女性と若者（男女信徒、養成期の男女奉献生活者、神学生）、貧困や疎外された状況にある人々とこれらのグループや人々と直接接触している人々、他のキリスト教宗派からの親善代表者、他の宗教や信仰の伝統の代表者、そして宗教に属さない人々の存在に特別な注意を払うことが重要です。さらに、司教たちは、大陸別会議の終わりに、自分たちの特定のカリスマと役割の観点から、生きたシノドスの体験を団体的に読み直すために集まるように招かれています。とくに、「最終文書」が真にシノドス的な旅の成果であり、行われたプロセスを尊重し、各大陸の神の民の多様な声に忠実であることを確実にするために、「最終文書」を検証し承認するという任務を遂行する適切な方法を確認することが求められているのです。

109. この「大陸ステージ文書」の発行から「討議要綱」の起草に至る過程は、次のような段階を経て行われます。

- 1) 「大陸ステージ文書」はすべての教区司教に送られます。各司教は、第一段階の調整を行った教区シノドスチームとともに、106項で示した三つの質問から始めて、「大陸ステージ文書」に関する教会的熟慮の過程を準備します。このようにして、各地域の教会は、「大陸ステージ文書」に集う他の教会の声に耳を傾け、自らの経験からそれに応える機会を持つことになります。
- 2) 各司教協議会は、そのシノドスチームの関与のもとに、各教区から出された三つの問いをめぐる考察を、それぞれの状況にもっともふさわしい形で収集し、統合する任務を負っています。
- 3) 各司教協議会の考察と識別は、その後、大陸タスクフォースによって特定された方法に従って、大陸総会で共有されます。
- 4) 各大陸総会の実施を計画する際、すべての人が識別に参加することを容易にする「霊的会話」（「手引書」付録B、8参照）という広く普及し、高く評価されている方法をどう使うかを考えることは有益でしょう。とくに、その三つの段階、つまり、参加者一人ひとりがフロアに立つこと、他の人の話を聞くことの共鳴、そしてグループによる果実の識別、が強調されるべきです。「方法論のガイドライン」ですでに強調されているように、司教、司祭、助祭、男女信徒、男女奉献生活者、さらに、周縁部の人々の視点を表現できる人々の、大陸総会への参加を確保することが重要でしょう。
- 5) 各大陸総会は、それぞれの固有の文脈から三つの問いに向き合った、最大20ページ程度の「最終文書」を起草します。「最終文書」は、2023年3月31日までに、各大陸タスクフォースからシノドス事務局に提出されなければなりません。大陸別会合の「最終文書」に基づき、2023年6月までに「討議要綱」が起草される予定です。